武蔵野日曜集会

われ信ず
――マルコ第９章14～29節――

１９６９年９月28日
小池辰雄

キリストが光っている　ああ信なき代なるかな　霊威力　われ信ず　信仰なき我を助け給え
絶信の信　神の本願　霊化現象　聖霊の祈り　使徒的信仰の世界に突入

【マルコ９・14～29】

14相共に弟子たちの許に来りて、大なる群衆の之を環り、学者たちの之と
論じいたるを見給う。15群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、御許に
走り往きて礼をなせり。16イエス問い給う『なんじら何を彼らと論ずるか』
17群衆のうちの一人こたう『師よ、唖の霊に憑かれたる我が子を御許に連れ
来れり。18霊いずこにても彼に憑けば、痙攣け泡をふき、歯をくいしばり、
而して痩せ衰う。御弟子たちに之を逐い出すことを請いたれど能わざりき』
19爰に彼らに言い給う『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕におらん、
何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許に連れきたれ』20乃ち連れきたる。
彼イエスを見しとき、霊ただちに之を痙攣けたれば、地に倒れ、泡をふきて
転び廻る。21イエスその父に問い給う『いつの頃より斯くなりしか』父いう『お
さなき時よりなり。22霊しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡ぼさん
とせり。然れど汝なにか為し得ば、我らを憫みて助け給え』23イエス言いた
もう『為し得ばと言うか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』24そ
の子の父ただちに叫びて言う『われ信ず、信仰なき我を助け給え』25イエス
群衆の走り集るを見て、穢れし霊を禁めて言いたもう『唖にて聾者なる霊よ、
我なんじに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』26霊さけびて甚だしく
痙攣けさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死
にたりと言う。27イエスその手を執りて起こし給えば立てり。28イエス家に入
り給いしとき、弟子たち窃に問う『我等いかなれば逐い出し得ざりしか』
29答え給う『この類は祈に由らざれば、如何にすとも出でざるなり』

●キリストが光っている

今日はマルコ伝９章14節から29節、「われ信ず」という題です。マルコ伝９章の始めの方

を見ますと、ヘルモン山における変貌のことが書いてある。イエスの直弟子のペテロ、ヤコブ、ヨハネ、この三人がイエスと一緒に山に登っていきました。

2六日の後、イエスただペテロ、ヤコブ、ヨハネのみを率きつれ、人を避けて高き山に登りたもう。

と。こないだは、私たちは鹿沢へ行きましたね。千メートル以上の山に入っていくと、非常に空気が澄明で、また何とも言えない、特に都会人には甦るような気持になる。身心共に非常に浄化される所です。キリストも祈られるときには、山によく登られた。都会生活をしている者は、とにかく年に何回か、山とか、あるいは大海を臨む所とか、そういう所に行くことが大変、魂のためには必要なことです。そこで、

斯て彼らの前にて其の状かわり、3其の衣かがやきて甚だ白くなりぬ、世の晒布者も為し得ぬほど白し。

と。弟子たちが驚いてしまった。そして、霊雲がそこに起きまして、

7斯て雲おこり、彼らを覆う。雲より声出づ『これは我が愛しむ子なり、汝ら之に聴け』

と。これは甦りの、キリストの復活の予表である。

9山をくだる時、イエス彼らに、人の子の、死人の中より甦えるまでは、見しことを誰にも語るなと戒め給う。

「甦るまで、誰にも言うな」とキリストは言われています。

「甦ったら、私はそんなぐあいだぞ」

ということですね。まず、素晴らしい現実です。14節、

14相共に

「相共に」というのは、キリストがこの三人の弟子と共に、他の弟子たちの許にやってきた。そうすると、大きな群衆もいまして、

14相共に弟子たちの許に来りて、大なる群衆の之を環り、学者たちの之と論じいたるを見給う。15群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、

「イエスを見るや否や、いたく驚き」というのは、キリストが光っているからです。なにか今までのイエスと違う。なにか光がさしている。

「汝らは世の光なり」

と言われるが、キリストは全くそのような非常な光を放っておられるので、そこで、「いたく驚いた」わけです。人の目には見えなくても、私たちは、

「汝らは世の光なり」

ということです。

私はこの「光」という字を書くだけでもう、何とも言えない気持になってしまう。本当に光であることを、皆さん、自覚してくださいよ。今日はその世界に入らなかったら、帰っ

てはいかんぞ（笑）。私の集会は、そんないい加減な気持で来る人は、来ない方がいい。そういう人はこの中にはいないはずですが。とにかく、一回毎が、或る決定的なものをいただきながら進んで行くのです。絶対におざなりでもなければ、単なる繰り返しでもない。

「イエスを見るや否や、いたく驚き」

という、こういう句に来て、あなた方は驚かなかったら本当に読んでいるのではないよ、

「なんだ？　群衆が驚いた？」

なんて（笑）。自分も群衆の一人になって、

「いやぁ！　キリストは光っている！」

と驚かなくては。だから、ドラマだと言っているでしょ。自分がこのドラマの中に入って、群衆と一緒にこの中へ入る。私の聖書を見せてやろうか。ちゃんと光っているから。

「イエスを見るや否や、いたく驚き」

というところは黄色くなっているんだから（笑）。まねしなくたっていいけれども。そういうわけなんですよね。

これは誰からも教わったのではない。註解書にも、そんなことは書いてやしない。

●ああ信なき代なるかな

私は八溝山という深山幽谷で三日間断食して、滝浴びをしたり、断食しながら、エレミヤのところを講じた。みんな聖霊に打たれて、祈りの世界に入った。それから、山を下って、郡山のこっち側の深川の療養所で集会をしたところが、やはり私が、とにかく知らない何かで異常なわけだね。それだものだから、集会をしたら、えらい霊的な現象が起きてしまった。

15群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、御許に走り往きて礼をなせり。
16イエス問い給う『なんじら何を彼らと論ずるか』17群衆のうちの一人こたう
『師よ、唖の霊に憑かれたる我が子を御許に連れ来れり。18霊いずこにても彼
に憑けば、痙攣け泡をふき、歯をくいしばり、而して痩せ衰う。

非常にすごい癲癇です。

御弟子たちに之を逐い出すことを請いたれど能わざりき』19爰に彼らに言い
給う『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕におらん、何時まで汝ら
を忍ばん。

凄い言葉ですね、これは。

「何時まで汝らを忍ばん」

と。まぁ、キリストが今の世の中に来られたら、そんなわけですね。日本みたいな国はもう愛想をつかしちゃう。

一体、「罪」とは何ですか。

「罪の世」

という。ヨハネ伝で「世」というと、罪の世、闇の世のことです。これはどういう字だろうかね。「目に非ず」ということかな。本当に見るものを見ていないということかね。キリストを見ても見えないんですね、福音書を見ても、ちっとも。罪とは不信である。神を信じないこと。もうひとつはっきり言うと、背き、反逆です。

「信」とは、神に従うこと、信従です。普通、「神を信ずる」というのは、

「神はあるか、ないか」

を信ずることが、「信ずる」かと思っているけれども、そんなことではない。「信」とは信従すること。信じ従うことを「信」というので、まちがわないようにしてください。

だから、信じ従うことの反対は、反逆なんです。背くこと。反逆の首魁（しゅかい）はサタンである。「背き」は、地獄のどん底にダンテは落とした。人間の罪のうち一番重いのは、この反逆罪というやつです。反逆、背き。神に対して闘争の意欲を燃やす。闘争なんていうのはサタン的な角度です。何て言いますかね、今の世の中は。神に対する反逆が「罪」ということです。

高等学校の生徒でも80％は、親と自分とは同等であると思っているんだから、もう日本はひっくり返るです、そういう傲慢な国は。もう病、膏肓（こうもう）に入っている。癌という病気があるけれども、あんな病気は何ということはない。一番恐ろしい癌は、今の日本人の心に住んでいるところの心癌だよ。心癌というやつが日本を亡ぼす。内村先生や藤井先生がいたら、何と言われるだろうね、本当に。もっと、文部大臣が権威を持たなくてはダメですよ。棄身で文部大臣をやってもらわなくては。もう今は外科手術をしないとどうにもならん。

とにかく、私たちは、この福音を受けた者は、一番素晴らしい本当の道を今、踏みつつあるので、皆さん一人ひとりが存在的に使命を持っている。この使命感に生きなかったならば、キリストに

「我汝を絶えて知らず」

と言われる。天国に行こうと思ったら、

「どっこい、待て。聖書をいくら勉強したかもしれないけれども、身体で証したか」

ということになる。どうぞ、いわゆるキリスト教界の、一般にいわゆる教会でも、牧師さんが本当のものを与えていらっしゃらないとすれば、魂が苦しくなるから、何か求めて、やっていらっしゃる方もあるわけです。

「およそ、小池なんていうのは変わっているから、幕屋なんていうのは……」

なんて、「幕屋」というのは何かサタン的な響きがあるそうだね（笑）。冗談でしょ。それでは聖書を見てくれと。聖書の幕屋に、どこにサタン的な響きがあるか。黙示録の最後のところには

「神の幕屋」

という言葉がちゃんと出ている。幕屋にもいろんな幕屋があるからね。サタンに誘われている幕屋もあるかも知れないけれども。とにかく、相対的にどれが善いの悪いのというこ

とではない。カトリックでも、プロテスタントでも、何々教会でも、無教会でも、何でもいいです。そういうことを品定めしているからいかん。

「そこにとにかく、本ものがあるかどうか」

ということだけです。人の話ではなくて、自分の話ですよね。それだけを本当に突き進んで行けば、他のところに本ものがあれば、

「ああ、そうです、そうです」

と、何も隔てがないです、私は。

道を歩いていても、喫茶店に入っても、どこへ行きましても、伝道ができるわけです。どうぞ、今、日本において信仰を持たされているということはいかに存在的に使命を負っているかということを本当に自覚していただきたい。

しかし、単なる自覚ではダメです。そこで、先へ行かなくては。

「ああ信なき代(よ)なるかな、我いつまで汝らと偕におらん」

と。キリストにこう嘆かれたらお終いだものな。キリストにこう嘆かれないようにしなければ。

「もう、末の世には信を見んや」

と、キリストは別なところで言われた。

牧師さんたちが、何かかんかおっしゃるようなことだったら、本当の光をもって接してやりなさいよ。

「あっ、あんたの方が上だ」

と、牧師さんが兜を脱ぐ。何も恐いものはないですよ。あなた方は、乙女の方でも。本ものを持ったら、何も恐いものはない。もう理屈もへったくれもないですから。黙っていたって、相手を圧倒してしまう。それはこの御霊です。

「ああ信なき代(よ)なるかな、我いつまで汝らと偕におらん」

と。即ち、今は不信反逆の世の中である。もう滔々(とうとう)としている。これに抗して行くためには、

「ああ信なき代(よ)なるかな」

というキリストの嘆きを、今度は自分の本当の嘆きにしてごらんなさい。その嘆きになるためには、本当に自分の中にこの信が来なくては、この嘆きは言えないね。そうでないと、嘆かれる方に入ってしまうから、嘆かわしいことになる。

●霊威力

その子を我が許に連れきたれ』20乃(すなわ)ち連れきたる。彼イエスを見しとき、霊ただちに之を痙攣(ひきつ)けたれば、地に倒れ、泡をふきて転(まろ)び廻(まわ)る。

霊というやつは、おかしなことでね、これは。

「その頃は霊があったけれども、この頃はない」

なんて普通は思っているんだよね。ところがどっこい。今だって、いろんな悪霊が働いている。マルコ伝5章のところにも、始めの方に、

「**1斯て海の彼方なるゲラセネ人の地に到る。2イエスの舟より上り給うとき、穢れし霊に憑かれたる人、墓より出でて、直ちに遇う。3この人、墓を住処とす、鎖にてすら今は誰も繋ぎ得ず。**

もの凄い力を持っているんだ、悪霊が、妙な霊が憑くと。

4彼はしばしば足械と鎖とにて繋がれたれど、鎖をちぎり、足械をくだきたり、誰も之を制する力なかりしなり。5夜も昼も、絶えず墓あるいは山にて叫び、己が身を石にて傷けいたり。6かれ遙かにイエスを見て、走りきたり、御前に平伏し、7大声に叫びて言う『いと高き神の子イエスよ、我は汝と何の関係あらん、神によりて願う、我を苦しめ給うな』8これはイエス『穢れし霊よ、この人より出で往け』と言い給いしに因るなり。」（マルコ5・1～8）

もの凄いですよ、キリストは。それで、どうですか、これは。今の穢れし霊が何と言ったですか。

「**いと高き神の子イエスよ**」

と言った。普通の人には言えないんだ。普通の人には見えないけれども、これは霊だから、霊には霊が見える。向こうは光の霊で、こいつは暗黒の霊なんだ。だから、「苦しめられる」と言って恐がってしまった。

「**出でよ！**」

とキリストに命じられた。まず、イエスという人は驚くべき人です。

ですから、いいですか、皆さん、本当にこのキリストに

「主よ！」

と呼ぶときには、本当にその力の世界に入るですよ。

聖書には「奇蹟」という言葉が多分ないはずだ。

「**力ある業**」

とある。「力ある業」ということを「奇蹟」という。「デュナミス」という。ダイナマイトの元の字です。「力ある業」を、即ち「奇蹟」という言葉であとで言っているわけです。

「エール」「エロヒーム」

という字がヘブライ語で

「力あるもの」

という字です。だから、威力、権威――霊威と言った方がいいかもしれない――霊的な威力を持っている。霊威力を持っている。霊威者なんだ。サタンは、霊的なやつらはみんな力を持っているからね。サタンに打ち勝とうとしてもダメですよ、負けてしまう。だけれども、「主よ」と、キリストの聖名を呼べば、聖名には力がある。

「イエスの名によりて歩め」

とペテロは言ったでしょ。そしたら、生まれつきの跛者が歩きだした。即ち、聖名を呼ぶところには、これは実名ですから、直ちに力を持つ。しかしながら、この力はそこらの腕力とは違う。この力は、救わんとする愛の力です。救済の力ですから。救済のためにはサタンを亡ぼす力である。私たちを救い上げるところの力です。ものを創造していく力である。そういう、究極においては神の愛である。神の愛の、キリストの愛の動くところ、そこに奇蹟が起きるんです。即ち、キリストの愛は力を持っていますから。

●われ信ず

21**イエスその父に問い給う『いつの頃より斯(か)くなりしか』父いう『おさなき時よりなり。22霊しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡ぼさんとせり。**

恐ろしいですね。

然れど汝なにか為し得ば、我らを憫(あわれ)みて助け給え』

「もうどうにもなりません、私としては。どうにもなりませんが、どうかなるでしょうか、ひとつ」というわけだな。そうしたら、キリストが、

23**イエス言いたもう『為し得ばと言うか、**

と。そういう仮定法で言うかねと。人間の考えはみんな、条件法・仮定法でものを言っている。現在・直説法が一番いいんですよ。

『為し得ばと言うか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』

はい、これが著しい言葉ですね。「パンタ　デュナタ」「一切を為し得る」という。

「信ずる者はすべてのことを為し得る。万能的になるぞ、全能的になるぞ」

と言う。そうすると、すぐ、頭の人は、

「全(すべ)てのこととは本当かな？」

なんて言って、いろんな場合を考えるんだ。

「こういう場合はどうですか、ああいう場合はどうですか」

と。もうそういうことを考えたら、その世界には入れない。

「信ずる者」という。

「われ信ず」

なんていうのは、一番、キリスト教の始まりだよね。アルファです。ところが、アルファは――

「我はアルファにしてオメガなり。始めにして終りなり」

と言うが――「われ信ず」ということが本当に入ったら、もうキリスト教は卒業なんですよ。始めにして終りということ。

「なんだ、先生は。『われ信ず』なんて分かり切ったようなことを言う」

と。分かり切ってないですよ、ちっとも。私はこれを死に至るまで、「われ信ず」をやっていこうと思っています、死に至るまで。私はもし、毎回題を掲げるとしたら、しょっちゅう「われ信ず」と掲げたって、決して差し支えない。これはアルファにしてオメガです。「クレドー」なんて言うけれども、なにも、あの「使徒信経」を言っているのではない。

「信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり」

と。信ずる者には一切ができる。キリストはこれに本当に徹して行った人です。これを実行した人です。キリストの如く信じた人が未だかつていないわけだ。だから、絶対に卒業できないですよ。

「卒業した」

なんて、とんでもない。しょっちゅう落第している。

福音書を見たらば、本当にそうです。ただ一度、キリストに勝った女がいる。カナンの女です。カナンの女の信仰にキリストは驚いた。マルコ伝7章24節に出ている。スロ・フェニキアの生れのギリシア系の女には関係ないというようなことで、イエスは相手にしなかった。

「イスラエルの者は子どもだけれども、お前は子どもではないから、やらない」

というようなわけだね。

「27**イエス言い給う『まず子供に飽かしむべし、子供のパンをとりて小狗(いぬ)に投げ与うるは善からず』**

なんて、キリストが相手にしなかったところが、

28**女こたえて言う『然り主よ、食卓の下の小狗(いぬ)も子供の食屑(たべくず)を食(くら)うなり』**

「私はパンくずで結構ですから、ください」と。

29**イエス言い給う『なんじ此の言によりて〔安んじ〕往け、悪鬼は既に娘より出でたり』**（マルコ7・27～29）

キリストはこのカナンの女の信仰に感激して、その娘を助けてやった。

●信仰なき我を助け給え

23**イエス言いたもう『為し得ばと言うか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』**24**その子の父ただちに叫びて言う『われ信ず、信仰なき我を助け給え』**

さぁ、皆さんはこの言葉を読んで、どういうことになりますかね。

「われ信ず、信仰なき我を助け給え」

という。「われ信ず」と言って、大いに力みますか。私たちは自分の信仰が当てにならない。自分の信仰が当てにならないんです。当てにならない信仰を、一生懸命で信仰を強くしようとしているのが、普通のクリスチャンなわけですよね。

「どうもまだ信仰が足りませんで」

と言って、一生懸命で信仰をだんだん当てになるような信仰にしようと思っている。一体、私たちの側に何か当てになるものが、究極的な意味で、あるでしょうかね。あると思う人は、ひとつ答えていただきたいな。人間の側に当てになるようものが何かあるだろうか。そうすると、どうもないようだな。本当に当てになるものがない。

もう、人間は全く失われたる存在です。失われたる存在を一生懸命で、道徳やいろんな規則で、まぁ、ある程度はやっているのさ、道徳の世界というのは。さんざん、歴史がこれを何回もくりかえしてやっている。ある程度は、いいですよ。決して悪くはない。世の中がとにかくこれだけ行っているのは、そういった当てにならないものでも、かなり当てになるから、やっているのさ、お互いにね。

だけれども、その当てにならない現象がたくさん出てきて、世の中は何と矛盾だらけだろう。そして、最後は、戦争戦争、人殺し人殺しだ。いろんなことが積み重なっているのが、惨憺たるこの世界の歴史の現状である。カトリック、プロテスタントなんていっても、これは喧嘩して、血なまぐさい戦争をやっている。三十年戦争なんていうのはその最たるものだ。

それほど人間というのはしょうがない。絶対に福音を要する。だから、私は、

「万人はこれ宗教人なり」

と言っている。宗教人であるということは、宗教を要するということです。万人はこれ宗教を要する。

「宗教の世界を持たなでいい」

なんていう人は一人もないはずです。それなのに、この一番深い正しい宗教のことは、それだけはそっちのけになって、一生懸命で、「ワッショイ、ワッショイ」と、何でもかんでも政治問題でもってやっている。とんでもない間違いだ。政治も経済もたくさん問題があるでしょう。大いにやってください。けれども、その奥に、その人自身の魂が本当に救われている世界を持たないで、何をやったって、それはみんな結局、ごまかしになってしまうんだ。

だから、万人はこれ救いを要する。「要求」というのは、本当はこっちの「要救」だ。要求ばっかりしているけれども。「救」を忘れて、「求」ばっかりやっている。救いを要する。今度、学校の朝礼で言ってやろう。皆が

「私たちは救いを要しません」

と言ったら、私は直ちに辞表を出してやめてしまう。私はそのために居るのに、要らないというなら、もう私は要らないということと同じことだから、さっさっと引き上げるよ。

そういうように、自分の信仰も当てにならない。

「信仰なき我を」

というのがそのことです。これが本当の姿です。

●絶信の信

「信仰なき我を、信なき我を憐れみたまえ。ただ本願に頼ります」

と。「憐れみたまえ」というのは、

「汝の本願に頼る」

ということです。

「主さま、あなたのご本願に頼ります。あなたの御力に頼ります。あなたの愛に頼ります」

ということ。

「信なき我を憐れみたまえ」

という、この「憐れみたまえ」です。結局、最後はこの「憐れみたまえ」です。

「憐れみたまえ」

というこの叫びが、

「我信ず」

という、信の叫びになってくるわけです。「我信ず」ということは、何かえらそうだが、ちっともえらくない。この「憐れみたまえ」というのが、

「汝の恵みにより頼む」

ということ。恵信一如です。恵信が一如であって、恵みが先です。汝の恵みに、汝の憐れみにより頼む。恵みにより頼む。恵信です。

プロテスタントが、

「信仰によって義とされる」

と、盛んにお題目を言っているよ。信仰が何ものかになってしまっている。とんでもない。そんなことを言っているから、いつまでも観念信仰で先に進まない。本当のところに来ない。この恵信一如です。汝の本願に私は救われた。

「私の信仰もダメです。何も当てになりません」

と言って、泣いて求めるのが「悲願」という。仏教の言葉はなかなかいいよ。悲しみ願う。そうすると、本当の本願、霊願がくる。

この恵みの中に自分を投げ入れて、「我信ず」と言うときの、この「信ず」はもはや自分の信ではないですよ。「我信ず」と言うときのこの「信ず」は、キリストの霊が来て、「我信ず」ということを言わしめている境地になる。

「我信ず」という言葉のこの「信ず」は、自分の「信ずる」ではない。そのことはもう、日本の偉大な坊主がちゃんと言っているんだ。

「弥陀の本願を信受するに勝(まさ)れる善なし」

と言う。弥陀の本願を信受することに勝れる善きことはない。即ち、本願を信受することであって、自分の信仰で何か信ずるというようなことではない。本願が来なければ、「我信ず」という言葉は出てこない。これを受けとらなければ。

だから、キリストという信の実体を受けとることです。「我信ず」ということは、そこから発している言葉であると同時に、自分を投げ入れている言葉なんです。自分をキリストの中に投げ入れる。投身するわけです。身体を、全存在を投げ入れてしまう。

どんなに行き詰まった現実であろうと、どんな苦しい現実であろうと、この世界に入って、勝利する。

「キリスト、わが中に。われ、キリストの中に」

と。何をもってこれを変えることができるか。その中に在って、「我信ず」というのが本当の「我信ず」です。

そうしたらば、すべてのことが為し得るという自信が出てくる。現実には、どうそれが為し得ないような現象が起きても、すべてのことは為し得るのです。現象面にとらわれて、何のかんのと言っているうちは、

「すべてのことは為し得る」

という、このキリストの言葉を受けとることができない。

「信ずる」とはキリストと一如となることです。キリストの本願のうちにおいて、発するところの信という、心でありまた言葉である。だからもう、「信なき我」というのがはっきり出てくる。自分の側にはもはや「信」なんて言うようなほどのものはありません。

「憐れみたまえ」

と言うときに、その「憐れみたまえ」の中にこの信が入っている。

この「絶信の信」の「信」はキリストの「信」ですよ。おのが信に絶するところに、キリストの信が来る。これを「絶信の信」と言う。これが即ち、

「我信ず、信なき我を憐れみたまえ」

と言うときに、本当に私たちに力となる。

●神の本願

この信を要するところの無教会にもちゃんと救いが来ている。さっきから言っているとおり、我々を救わんとするキリストの本願、神の本願が来ているのだから。救わんとするキリストの本願は、いかなる事態、いかなる条件をも必要としない。無条件に救う。無条件です。

そうすると、

「ああ、自分に背いている者、自分を裏切った者は、かわいそうだな」

ということになる。可愛そうだ。何を聞いていたか。この信が受けとれませんかと。だから、

どのようなことがあっても、その人は本当に光になる。その人はもはや光になっていますから、キリストの光に。

「信心とは如来の御意を受けさしめたもうなり」

と書いてある。これは親鸞の言葉だな、「信心とは如来の御意より起こさしめたもうなり」と。

「もし、行者の心を言わば偽りならいてかたくなれば、まことの法とは申しがたく、如来の直ぐなる御意なるによりて真の心とは申すなり」

と。真の心とは、真心とは即ち、如来の心であるという。日本の一流の坊さんたちの入っている境地は素晴らしい境地ですからね、ヨーロッパの神学なんてかないやしないです。

キリストの

「信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり」

というのは、自分を本当に任せきる者には――自分の信仰を信じているのではない。キリストの愛に、神の愛に任せきること。

「主さま！」

と叫ぶことが即ち、信の叫びです。「主さま！」というのが、「我信ず」という叫びなんです――そうしたらば、ちょうど如来に叫んでいるようなぐあいに、俄然、力が来てしまう。直ちに、即刻。そういう真の力がサタンを退ける。苦しめる者、悲しめる者、行き詰まっている者を救い上げ、助け上げるところの、そういう本願の力です。これを是非ともいただかなかったら、何の信仰生活であるか。

●霊化現象

25イエス群衆の走り集るを見て、穢(けが)れし霊を禁(いまし)めて言いたもう『唖(おうし)にて聾(みみしい)者なる霊よ、我なんじに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』26霊さけびて甚(はなは)だしく痙攣(ひきつ)けさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死にたりと言う。27イエスその手を執りて起こし給えば立てり。

キリストが手を取るというのは、キリストが手を取ればもうちゃんと、按手と同時に力が来ますから。そうすれば、ガタンとなった者が霊を吹き返してしまう。

まぁ、私も時々、霊的な集会ではそういうことをやりますけれども。だから、普通の牧師さんたちが何を言ったって、何ともないですよ。

「小池は、あれは危険だから、あんな集会に行ってはいかん」

なんて。それでは、聖書はもっとも危険な書だと思っているかというんだ。聖書よりかまだまだ、私のところは低いんだから。聖書を危険だと思わないで、私みたいなものを危険だなんて思うのはとんでもない間違いだ。

「まず、聖書というのは何とこれは危険な書だろう」

と、それなら話はわかるよ（笑）。ところが、これによらなければ、どうにもならないよう

に人間はできているんだ。

28イエス家に入り給いしとき、弟子たち窃(ひそか)に問う『我等いかなれば逐い出し得ざりしか』29答え給う『この類(たぐい)は祈に由(よ)らざれば、如何(いか)にすとも出でざるなり』

キリストは、この場合もやはり、夜もすがら祈って変貌の事態が起きた。そして、霊を追い出した。

祈りにおいて、キリストと一つになること。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

とパウロがさんざん言っている、この神秘的な境地に入らなくては。しかし、これは現実中の現実ですよ。これよりもはっきりした確かな現実はないんです。「われキリストのうちに、キリストわがうちに」ということは、申し上げているとおり、十字架を通って、十字架が門だから、この門を通って、遠慮なく無条件に入れる。

「まだ私はこういう艱難を負ってから、もっと労してから」

なんて、いつまで考えているか。艱難も必要でない。イエスの十字架はあなた方に何か条件を付けてますか。

「もう少し聖書を読んでから」

とか、

「ローマ書8章を暗誦してから」

とかね（笑）。そんなことは何も言ってない。そのままでいいんだ。

その中へ入ったら、私たちは変貌するんです。これは霊的な変化を起こす。聖化現象、霊化現象、これは中へ入ると起こる。入らないで起こそうとしたって、これは無理だよ。そして、本当にキリストと一つになっているところは、本当の「我信ず」の世界だ。

「すべてのこと為し能う」

という、その世界に入っていく。

●聖霊の祈り

いかなる問題でもそうです。何も、私は肉体上の問題を言っているのではないですよ。マルコ伝11章22節以下にも書いてある。無花果(いちじく)の樹を詛(のろ)われたら、無花果が枯れてしまったものだから、

「22イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。23誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移りて海に入れ」と言うとも、其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑わずば、その如く成るべし。

キリストは

「神を信ぜよ」

とおっしゃったけれども、私たちは

「主を信ぜよ」

でいい。いいですか、キリストです。私たちの具体的な主はキリストだから。キリストをぬきにして、神に行ったって、これはダメですよ。キリストに行けば、

「ああ、知らないまに、これは父の中にあった」

ということになる。キリストはちゃんと父の中に入っているんだから、一番具体的なキリストを受けとれば、

「ははぁ、これは父の中にいました」

と。キリストをぬきにして、父に入ろうとしたって、これは無理ですよ。ここに十字架があるんだから。この十字架なしに入ろうとしたら、これは強盗だよね（笑）。ここに入れば、すでに一つになる。そして、これは聖霊ですから、聖霊の充満している世界だから。三重（神・キリスト・我）の内接円になる。ここに聖霊が来るから、四位一体という。

其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑わずば、その如く成るべし。
24 **この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。**

「祈りて願う事は、ただ思って願ったってダメだよ」

と。祈るとは、本当にキリストを100％に「然り」と言い、己を「否（いな）」と言って進んでいく世界が、この「祈り」の世界です。私たちは、あの旧約の詩篇全150篇の祈りではもの足りない。詩篇の中には、まだ聖霊の世界まで行ってない世界があるからね。聖霊の祈りでもって、詩篇の句を祈っていけば、それはいいです。

けれども、旧約の祈りに、どうしても、「主の祈り」という詩篇第151篇というのが要るわけだ。それはもう、パウロの書簡や何かに、そういう祈りが散在している。そういう祈りの世界で、本当にキリストの中に入る。それは御霊のゆえに、御霊にあるところのゆえにです。

●使徒的信仰の世界に突入

そうすれば、

「必ず成るべしと信じて、心に疑わずば」

とは、

「キリストの本願は必ず成るべしと信じて疑わずば」

ということです。

人間の側の祈りには間違いもあるさ。けれども、それは聖霊が執り成したもう。だから、自分の祈りが聞かれなかったと言って、それで何とかかんとか言ったってダメだよ。それは祈りの方が間違っているのだから、キリストは聞きやしないよ。もっと別な聞きかたをなさる。

「あれ、あれ？」

なんて思っているよ。それの方が本当に聞かれている。自分が執り成されている。聖霊に執り成される。だから、自分の願い以上のことが聞かれている。いいですか。自分の願い以上のことが必ず聞かれていると信じて疑わずということです。現象も問題でない。そうしたらば、もう楽しい。楽しくてしょうがないですよ。何をみんなふくれているんですか。

25また立ちて祈るとき、人を怨(うら)む事あらば免(ゆる)せ、これは天に在(いま)す汝らの父の、汝らの過失(あやまち)を免(ゆる)し給わん為なり』（マルコ11・22～25）

十字架で赦された私たちは、本当に十字架において人を赦す。相手は、あいかわらず反抗しているかも知れないよ。それは、反抗しているやつはただ審かれているだけのはなしです。

「**仇(あだ)を復(かえ)すは我にあり**」

という。一切を神に委ねる。審判は厳として存する。こっちはただ執成(とりなし)をやるだけのはなしだ。これはもう勝利です。ヘブル書の大祭司の精神というのはそれなんです。本当の勝利です。勝利とは、どこまでも相手を救い上げようとする悲願を勝利と言う。その角度です。相手を倒すのではない。

もう、お気の毒になるですよ、本当の聖霊の世界に入っていない牧師さんがおっしゃっていることは。可愛そうだなと思う。なぜ、そんなゴタゴタ言っているかと。誰が何と言おうとも、

「絶対に使徒的信仰の世界に突入しよう」

という、それだけの求めをもってくれれば、この聖霊の世界に入る。それをしないで、何のかんのやっているうちはダメですよね。

「**ただこの一事を欠く**」

と、キリストに言われてしまうよな。これが、

「**我信ず、信仰なき我を助け憐れみたまえ**」

ということです。「使徒信経」に第一条から十二条まで、「我信ず」からずっとあるんだけれども、本当にその角度から使徒信経を読むのなら、本当に読めるけれども。使徒信経という一つの命題を一生懸命で信じこもうとしたって、それではひとつも力にも何にもなりはしない。ドイツの教会へ行っても、「主の祈り」と「使徒信経」をやるんだ。おやおやと思って、私は聞いていたんだけれども。空念仏になってしまうから。

もう言うことなし。では、そこまで。